

---

# 予言ちゃん

たまと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

予言ちゃん

### 【Zマーク】

Z9078A

### 【作者名】

たまと

### 【あらすじ】

予言の当たる確率が今のところ百発百中（～）の予言ちゃん。その予言ちゃんを取り巻く人々のお話。

会えなくなる。

昼食時間の学校の屋上

「タカシは、明日からリナちゃんと会えなくなるよ。」

予言ちゃんにそう告げられた。

予言ちゃんの予言は、絶対に外れない。この前、『タカシは、大事な物を無くす』と告げられた時は家の鍵をどこかに落としたし、一年前の『タカシに不幸な事が起る』といつ予言の時は、骨折した。

今まで予言ちゃんに告げられた予言は、絶対に当たるという事だ。  
少なくとも、俺に告げられた予言は。

「えー、マジかよ。ショック。」

そう口では軽く言つたものの、心中はかなりショックだ。

“リナちゃん”とは、密かに俺が想いを寄せてる同じクラスの女子だ。

最近、少しづつ話しかける様になつたのに…

「タカシ、いいの？」

「『いいの？』って何が？」

俺は、リナちゃんに“密かに”想いを寄せてたわけだから、あまり人にはこの恋心を告白していない。

予言ちりやんも例外じゃない。

「別にタカシがいいなら、いいけど…」

予言ちりやんが、意味深な言葉を残す。

「会えなくなるって、転校かな？」

俺は、そんなことを何気に訊いてみる。

「さあ？ わからない。」

予言ちりやんは、絶対に外れないことしか教えてくれない。

何でも今までの百発百中でやつてきた予言を外したくないらしい。

まあ、そんな予言ちりやんの予言だから、俺は確実にリナちりやんに会えなくなるんだろう。

改めて考えるとかなりショックだ。

今は、昼食時間だからあと一時限。

別に席が近い訳でもないから、その一時限で話す機会は殆ど無いだろう。

結構本気だったのにな、俺。

『タカシ、いいの？』

予言ちりやんの言葉が、頭をよぎる。

良くない。

全然良くない。

好きなんだよ。

本気で好きなんだよ。

告白しよう。

放課後が、良いか？

いや、放課後に確実にリナちゃんに会える保障は、無い。

じゃあ、五時限目後の休憩時間？

ていうか、本当に告白しようか？

「リナちゃんは、今は友達と一緒にE組で弁当を食べている。」

考えてる俺の横で、ずっと黙り込んでたリナちゃんは、口を開いた。

ちよつとした予言。

気付いたら足は動いていた。

俺は、少々イライラしていた。

「何怒つてこるの?..」

予言ちゃんが、そう俺に訊いてきた。  
俺の答えはもううん。

「『リナちゃんに会えなくなる』って、リナちゃんはリナちゃんでも△組の藤堂里奈さんじやねえか!」　△組の藤堂里奈が転校したらしい。

俺のクラスの△組の佐伯利奈は、今日、普通に登校してきた。

「予言、当たつてるじゃん。」

予言ちゃんは、言つた。

そう叫たつていて。

だが、俺は、藤堂里奈とは何の面識も無い。

「あーーー昨日、勢いで告白しちゃつたじゃないか!!」

顔の前で告白したから、今日、顔の田線がとても気まずかった。

「いいんじゃないの?好きだつたんだから、告白しても。」

一理ある。

いや、全理ある。

俺はこんな機会でもなかつたし、せひと告白なんて卒業式ぐらいしかしないだろ?。

でも、それじゃあ遅い。  
わかってる。

わかつてた。

「でも、アレは予言でも何でもねえよ。嘘、昨日こは藤堂さんの転校を知っていたみたいだし。」

「予言ちゃんは、少し間を置いてこいつを言った。  
『だつて、予言外したくなじし。』」

俺の高校にこる予言ちゃん。  
その予言は、今のところ五百中。

余へなくなる。（後書き）

黙文です。すみません。完全に勢いで書きました。

「コナタヤ とな、今日、出立れたるよ。」「

朝、登校してきただり『おはよ』の代わつて予言ひをかり、やつてられた。

予言ひやんの予言ひ、侮れな。

予言ひやんは、『予言ひやん』と呼ばれてゐるやつは、やつ頗繁に予言をしない。

だなび、たまに予言をしたひその予言ひを必ず当たる。

一番、世に有名な予言ひは、『校長交通事故』の予言ひと一年前の“斎藤君の骨折”の予言だ。

そんな予言ひやんの予言ひだから今回も必ず当たるのだろ。

「え、誰に？誰に？」

「ああ？ わからな」

予言ひやんは、必ず当たる予言ひをしない。  
当たるかどうかわからない予言ひをしない。

「予言ひやん、お願ひ。予言ひやなくして、予想でいこから教えてー。」

自分が、出立されるんだ。  
やつてひいて歸くほど氣になつてしまつがない。

「うーん、どうだろう。木村君がタカシあたりじゃないかな。あと加賀君とか…、ダメだ。わからない。」

頼りない答え。

でも、今日告白されるのは、きっと確実。

そんな状況は、相手が誰かわからくてもワクワクする。

でも、こんな急に告白なんて…

あ、

「“リナちゃん”って、D組の藤堂さんじゃないでしょ？」

去年の終わり頃、私は予言ちゃんに『いつ予言された。

『リナちゃんは、来年はD組だよ。』

そしたら、見事に藤堂さんが、D組になつた。

確かに二人共、名前が“リナ”だから間違いではないけれど…

「大丈夫。今日は佐伯利奈が誰かに告白される。」

・・・

なんかほつとしたような、拍子抜けしたような変な気分。

『『告白される』か…。あんまり好きじゃないなあ。』

予言ちゃんが、呟く。

「え、なんで？」

他愛もない質問。

「だつて、嫌じやない？たとえ、両想いだとしても相手の方が気持ちが上な気がして…」

予言ちゃんが、そう言つたとこひで鐘がなる。

\* \* \*

『相手の方が気持ちが上な気がして…』

予言ちゃんの言葉は、四时限になつた今でも何故か頭の中で何度もリピートする。

そういうえば、今まで告白したことないな。

されたことはある。告白されたら、その人がいい人だつたら、他に気になつてゐる人がいてもOKしてしまつ。

そんな私。

ダメだな、私。

大体、今日、告白してくる人は誰か想像はつく。

私たちの人の事は、前から気になっていた。

予言ちゃんの今まで伝説中の予言を外したくなつた。

私から告白する。

\* \* \*

放課後

結果からいつと私から告白するとこいつ予言への抵抗で行つた告白はつまくいつた。

私は、今日の昼食時間の始めに加賀君に告白した。

うまくいつた私の初めての告白。

うまくいつた、予言ちゃんの予言外し。

と、言いたいけど…

うん、嘘。

告白も予言外しもつまらないかなかつた。

加賀君は、彼女がいるといつ理由で断られた。

予言の方は、加賀君に告白したあとに、齊藤君から告白された。

残念な結果。

だけど、心はそんなに暗くない。  
むしろ清々しい。

自分から告白する雰囲を得たから。

齊藤君には、『ちょっとと考えをせん』と聞つたが、明日断つ  
もりだ。

でも、今日の齊藤君の告白でちょっと齊藤君のことを好きにな  
つてしまつた。

あんな大胆な告白されたらねえ…  
かなりドキッとした。

だけど、断る。  
だから、断る。

いつか私からもつと齊藤君のことが好きになつたら私から告白  
したい。  
私の方が、気持ちが上といつ證明に私の方が大胆な告白をしよ  
うと思つてゐる。

私の高校にここのお姉ちゃん。  
そのお姉さんは今のところ田中だ。

## 転校する。

『藤堂さんは、いつか転校するよ。…転校する理由？…あ…わから…ない。』

予言ちゃんにそう言われたのは、確かに一年前くらい。  
まさかあの時は、一年後にホントに転校するなんて考えてもみ  
なかつた。

私、藤堂里奈は、今日限りでこの高校を去る。

やり残したことは…ある。

友達と朝が来るまで遊びまくつた。  
先輩達に別れの言葉も言った。…だけど、加賀君…  
まだ君にあの時のこと謝つていない。

「何やつてんの？」

校内にある自販機の前でボケッとしてた私に誰かが話しかけて  
きた。

「予言ちゃん…」  
「どうしたの？」  
「別に…ただジューース選んでただけ。」  
「へえー、三十秒も。」

数えてたの？

予言ちゃんは、少し変なところがある。

まあ、みんな公認のことだが…

「予言ちゃん、また予言切たつたね。」

「ん？ああ、転校のこと。」

私は、自販機のアイスココアのボタンを押した。

「やっぱ、父親の仕事の都合？？」

予言ちゃんが、訊いた。

「え！知つてたの？」

「うん。だけど確実じゃなかつたから、あの時は言わなかつた。」

予言ちゃんは、自販機でお茶を買つた。

「何でもお見通しだね、予言ちゃん。」

「やり残したこととかは無いの？」

ホント。

何でもお見通しだ。

\* \* \*

アレは、まだ高校一年の頃。

私は同じクラスだつた加賀泰司と付き合い始めた。

加賀君の気持ちは、わからないが私は加賀君が大好きだつた。  
今でも…

私は加賀君に謝らないといけない。

一か月前。

私と加賀君は喧嘩をした。

理由は、私にあつたけど私は折れなかつた。

その日から、私と加賀君は一言も喋っていない。  
自然消滅でいつのかな。  
違うか。

取りあえず、あの日から私と加賀君は、恋人同士ではなくなつ  
ていた。

だけどね、加賀君。

私はまだ君のことが、好きなんだ。

だから最後に謝りたいけど…

\* \* \*

「おーい。」

その言葉で私の考えは切斷された。

「え、へ？」

「またボーとしてたよ。大丈夫？」

大丈夫じゃない。

加賀君のことを考えたら泣きそうだ。

「あ、そうだ。」予言ひやんは、急に声を上げた。

「お別れのプレゼントに予言をあるよ。」

そういつて、予言ちゃんは扉を開じた。

三十秒ぐらい立つただろうか。

私は小さめのスチール缶に入っているアイスココアを全部飲み干した。

その時、予言ちゃんが瞼を開けた。

「今から…、うん、今からだな。今から体育館裏に行くと良い事があると思つ。」「『あると思つ』

その言葉は、予言ちゃんの予言では、初めて聞く言葉だった。

「自信ないの？」

「そう聞くと。」

「うん、無い。けど行かなことさつと藤堂さんが後悔をする。」

予・三・ち・や・ん・は、眞面目な顔でさつ告げた。

「あ、やっぱー。時間喰つた。タカシが待つてたから、行くね。」  
さつと、予・三・ち・や・ん・は去つていつた。

私は、何も考えずに体育館裏に向かつて歩き出した。

\* \* \*

予・三・ち・や・ん・は、私にこれを見せたかつたのだらつか？

体育館裏に着いた私が見た風景はほんの少し距離を置いて向かい合つた女子と男子。

じつや、女子の方が告白する場面に私は来たらしい。  
私は、校舎の影に隠れてそれを見ていた。

私は、その女子と男子を知つてゐる。

女子の方は佐伯利奈。

去年、隣りのクラスで、名前が同じ“リナ”だから印象深い。

もう一人は…  
加賀泰司。

予・三・ち・や・ん・は、これが私にとつて良い事だと思ったのだらつか？  
好きな人が告白されるのを見るのは良い事なのだらつか？

そう考えていると、加賀君が口を開いた。

「「めん、俺、付き合つてる奴がいるんだ。」  
え？」

「え？ 加賀君つて藤堂さんと別れたんじゃないの？」

そう、別れた。

もう新しい彼女が出来たんだ…

「うん。多分、藤堂は別れたと思っていると思う。だけど、まだ別  
れの言葉も無いし、それに…俺はまだ藤堂が好きなんだ。」  
え？」

「俺が一方的に付き合つて思つてるだけかもしない。だけど、ま  
だ別れの言葉も無い。だから、佐伯とは付き合えない。」

\* \* \*

それから、どうなったかはあまり覚えていない。

私は、ずっと校舎の影で涙を流し泣いていた。

悲しいのかな？  
嬉しいのかな？  
わからんないや。

でも涙は止まらない。

そんなうっすくまつて泣いている私に差し出す手があった。

「か、加賀君…」

今なら言える。

あの時から言いたかった『「めんなさい』を。

だけど、私の口から出た最初の言葉は、

「ありがと…。」

泣きながらだから、上手く言えたかはわからない。

私のいた高校にいるやまちゃん。  
そのやまは今のところ発達中だ。



「加賀君は、藤堂さんと付き合ってたんだね。」

「何言つてんだ、ここつ。」

高校入学して入学式が終わり体育館から自分のクラスについて初めて言われた言葉が、コレ。

「あ、あー、気にしないで。予言ちゃんは、少しおかしいから。」

横から入ってきた“予言ちゃん”と言われた奴の友達と思われる奴は、通称“予言ちゃん”的口を両手で塞いだ。

「俺、隣りのクラスの齊藤隆司。よろしくな。」

「いっは、まともらしい。」

「俺は、加賀泰司。よろしく。」

通称“予言ちゃん”は、口を塞がれつつもモガモガと何かを言つていた。

\* \* \*

「いっ等の話を聞くと、なんだか不思議な話ばっかりだ。」

予言ちゃんは、予言の当たる確率が100%といつ話に。

そのお陰で今日は、交通事故に遭うはずのバスに乗らなかつた

りと。

なんかうさん臭い。

「大体、藤堂って誰だよ?」

「さあ? わからない。」

「ムカつく返事だ。」

そこで鐘がなった。

「あ、俺、自分のクラス戻るわ。」

斎藤が去った。

俺と予言ちゃんは、隣りの席。

どうしよう。

斎藤なしで予言ちゃんと話せる自信がない。

予言ちゃんは、はつきり言って第一印象最悪だ。

意味分からん事言つて、無愛想だし。

ガラガラ

クラスの担任らしき眼鏡の男が、教室に入ってきた。

「はーい、席について!」

\* \* \*

それから担任の自己紹介、クラスの皆の自己紹介が終わった頃。

ガラガラ

「お、遅れて、すみません！」

一人の女子生徒が、教室に入ってきた。  
きっと不自然に一つ空いてる席の子だろう。

にしても、初日から遅刻ってどんな奴だよ…

「藤堂里奈さんだね？」

「はい。」

その子の顔を見た。

一目惚れだった。

「乗っていたバスが事故に遭ってしまった…」

\* \* \*

「俺と藤堂つて、いつの付合いつの？」

入学式から一週間経つた。

学校にも慣れ。

予言ちゃんにも慣れた。

「アレ？ 口いとか信じないんじゃなかつたつけ？」

朝の教室。

予言ちゃんは俺の質問にそう答えた。

確かに俺は、口いとか信じない奴“だった”。

だけど、予言ちゃんと一緒に居ればそんな奴も変わっちゃつ。

「別にいいだろ。教えてくれたつて…」

「うーん、どうだらう？ こつ頃…うーん、わかんないや。」

一週間経つて予言ちゃんについて分かつたこと。

それは、絶対に当たる予言をする。

逆に“絶対に”当たる予言しか他言しないらしい。

「加賀君、藤堂さんに惹かれてきたの？」

予言ちゃんは、なんでもお見通しの気がしてムカつく。

「いや、別に。」

惹かれてる。

けど、予言ちゃんへの抵抗の言葉が出来る。

『藤堂さんと付合つただね。』

その予言とは裏腹に俺と藤堂は、全く接点はない。

予言ちゃんは、いつ頃かは予言していないから一年後一年後、い

や、もしかしたら大人になつてからかもしれない。

予言ちゃんは、少し黙り込んでこう言つた。

「あ、加賀君。明日は、絶対に休まない方がいいよ。」

まるで何かを思い出したかのよつて予言ちゃんは言つた。

\* \* \*

翌日。

台風が上陸したために学校は、休みになつたらしい。

俺は、馬鹿か？

俺は、暴風の影響で外に出れなくなつた校舎にいる。

一応、教師は一人一人居て、台風対策をしていた。

その教師一人に『今は、暴風で外に出るのは危ないから風が弱くなつてから帰りなさい。』と言われ、一人自分の教室で自分の席から窓の外の様子を見ている。

『明日は、絶対に休まない方がいいよ。』

昨日、予言ちゃんに言われたことを思い出した。

何が、『休まない方がいいよ。』だ？

怒りが沸き出でた時。

ガラガラ

「え、あ、加賀君もー!?」

藤堂さんだつた。

そこから、藤堂と俺は、本当の意味で惹かれあつていく。

その半年後、俺達は付き合い始めた。

\* \* \*

「さよならだね。」

藤堂が、引っ越しす日。

俺は学校をさぼつて藤堂の見送りにきた。

「遠くに行つても忘れないでね。」

涙田で藤堂は言った。

藤堂の親は車で待つてくれている。

「また会えるよ。」

俺は言った。

「予言ちゃんの予言よつは、頼つないけど、コレは“俺の予感”。」

しばらく話した後、藤堂は、親の車に乗った。

「いつになるか分からんけど、いつか必ず迎えに行くからー…その時まで、俺のこと忘れんなよー！」

去り行く藤堂の背中に喉がはち切れそうなくらい大きな声で言った。

「うん、待つてる。」

藤堂は、枯れた声でそう答えた。

\* \* \*

あの山風の次の田。

予言ちゃんからいひがひられた。

「加賀君と藤堂ひとせ、将来一緒にいそがへ。」

「何それ？ 予言？」

「んー、こや、勘。」

俺の学校にいる予言ちゃん。  
その予言が今どこの山風の田。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9078a/>

---

予言ちゃん

2010年10月20日13時24分発行